

指

区立体育館で受付のバイトをしている山本左枝は、交代時間になったのでそのままアパートに帰ろうか書店に寄ろうかと迷いながら、靴を履き替えていた。とそのとき、使用団体・目的一覧の掲示「コンタクト・インプロ」という名称が目にとまった。

体育館でコンタクトって、どういうことだろう。使用場所がステージとあるけど、ステージを使って何をするんだろう。

左枝は、ステージ横にある扉から、そっとステージ上を覗いた。とそこには、指導者と思われる中年男性がひとり、あとは正対したペアが八組という小さな集団があった。男性だけのペアもあれば男女のペアもある。

音楽をかけず、言葉もまったく発しない。正対した二人がそれぞれわずかな動きを見ているだけだ。

よく見ると、厳密には正対というのではなく、身体一つ分だけずらして互いの右手が正面になるように対している。そして、手を差し出して互いの右手人差し指の先を付けている。わずかな動きは、その合わせた指先の位置が前後左右あるいは上下に微妙に動いていたのだ。

足を肩幅に開いた姿勢でその場にとどまったままなので、ちょっと見ただけでは、ほとんど動きらしい動きは感じられない。

「はい、やめー」

指導者らしい男性から声が掛かって、指先が離され、ふうという溜息がそれぞれから漏れた。首を回したり腕を上げ下ろししたりする姿も見られた。

よほど緊張していたんだね、これってヨガの一種かなあ。

「皆さん、すこし緊張しすぎです。そんなことでは相手の微細な動きをうまく感じとれないでしょう。もっと力を抜いてラクにラクに」

その声を聞いて、数人からくすっと笑いが漏れた。凶星だったのだろう。

「では、相手を替えてもう一度やります。ではフロア側のひとがひとつだけ右にずれてください」

この方法で何度もやっているらしく、端のひとりが横に伸びた集団の反対に小走りで動いて、すぐに組み替えは終わった。

「はい、では指先を合わせてください。そして指先に集中。相手の指の面を感じとれていますか。指先は押されていますか、それともわずかに離されそうになって自分の指がそれにくっついていこうとしていますか。あるいは、お互いの指が下のほうに動こうとしていますか。感じとってください。そうして、その動きに対して、素直に、自由に反応してみてください。

ただし、足元を動かすのは禁止とします。自分を一本のしなやかな木、とイメージしてください。枝先でかすかに感じる力が木の幹にまで伝わるような感覚をお願いします」

左枝は写真の専門学校の二年生、誘われて劇団「シェーブルドール」に入ってそろそろ

一年が過ぎようとしている。異なる芸術分野に関わることも写真にプラスになるだろうから、と同じ専門学校に通う笹尾昭斗に勧められての入団だった。

昭斗は劇団の制作部に所属している。といってもこの劇団は全部で三十名弱の小集団で、制作部というと聞こえはいいが、舞台上で演じる以外のすべてを受け持つ裏方だ。左枝は、制作部の手伝いでもできればと思って入団したのだが、舞台上立つ女性が少ないからと懇願されて、脇役として出演するようになっていた。

これといった上演実績のないセミプロ劇団だったが、この四月、大学生の美咲が入団してから風向きが一気に変わった。彼女が初出演した舞台がたまたま現代思想の新旗手とされている若手演劇評論家の目にとまり、行数はわずかながらも文芸誌で絶賛されたのである。それ以来、劇団の知名度は急上昇し、公演に足を運ぶ客も増えてきた。

「なあ左枝、最近何かあったんか？」

専門学校のゼミで隣りに座った昭斗から声をかけられた。劇団が活況を呈して張り合いは良いもののメンバーそれぞれが一段と忙しくなり、落ち着いて話もできなくなってきていたのである。

「何かって、どういうこと？わたしはいつもどおりだけど」

「このあいだ、新作の本読みがあったろ、あの日、たまたまポスターデザインの打ち合わせが延びて、演出の古坂さんとそのまま本読みの場に居合わせるようになったとき、おまえの台詞、しっかり聞いちゃったんだ、そしたらさ」

「えっ、まだ台詞が頭に入っていないから、ホン見ながらの読み合わせだったんだよ」

「そりゃそうかもしれないけど、なんというのか、他の役者の台詞としっくりきているというのか、とにかく、もう、おまえが流れの中で気持ちよく泳いでいるみたいなの」

「たまにこうしてしゃべれているからって、お世辞言ってる？」

「おまえにお世辞いっても始まらないよ」

「でもわたし、自分でも俳優向きでないことは痛感してるのよね。ほら、美咲って、華があるってよく言われるでしょ。わたしにはそういう持ち合わせはないし、声も出ないし、ほんとは今でも昭斗と一緒に制作のお仕事、していきたいんだ」

「うーん、そうかなあ。でも、なんか最近の左枝は違うんだよね。ゾーンに入ったというのか、現にこうして今しゃべっていても、オレの気持ちがよくなってくるというのか…」

ゼミの講師が入室したので、会話はここで途切れてしまった。そしてゼミ終了後は、ふたりとも差し迫った用事があったので、手を小さく振って別れた。

しかし、左枝には思い当たることがあった。

コンタクト・インプロである。正式名称はコンタクト・インプロビゼーション、即興で動くコンタクト・ダンスのことだ。

ふたりの踊り手が身体のどこか一部で繋がりながらさまざまな形態に変化していくダンスであり、一カ所で接触すなわちコンタクトする他には一切の制約をもたない自由なダンスである。BGMを流しながら踊ることはあってもそのリズムや曲想にとらわれてはならず、音楽と付かず離れずの関係を保ちながら踊る。

あの日左枝は体育館でコンタクト・インプロの会への加入を申し出た。人差し指の先だ

けで相手のわずかな動きをを感じとって動くレッスンに、自分の求めていたものの一端を見た気がしたのだ。

次の回からレッスンに参加した。

昭斗とはその後もすれ違いが続いたが、ゼミで隣り合ったときに声をかけた。

「ねえ、昭斗。今日は劇団の完全休養日だし、もし、このあと、バイトが入っていないようだったら、ちょっとだけ付き合ってくれる？」

「付き合うって？」

「実はこのあと、Cスタジオが二時間だけ予約できたんで、一緒に来てよ。見て欲しいものがあるの」

専門学校のスタジオは撮影練習とかサークルの打ち合わせとかでよく使われる。ふたりだけで撮影の特訓か、まさか、左枝がモデルになってこっちは撮りまくる、でもどんな衣装のモデルになって…あるいは衣装を着けずに、なあんてことはあるわけがない。

「少し見てほしい、というか、一緒にやってほしいことがあって」

とそのとき、ゼミの講師が入室したので、質問はお預けになった。そのあとの二時間のゼミは、一九六〇年代のアメリカの写真史を主題とした、普段ならのめり込むような内容だったが、昭斗はうわの空で過ごした。

そして、ふたりはCスタジオへ向かった。どのスタジオも不正使用を防止するためか、クルーザーにあるような丸窓が付いており、外部からモデルを招いての撮影会などで事前申請した場合を除いては、外側からも覗けるようになっているので、冷静に考えれば、昭斗をうわの空にさせてしまうような事態はありえないのだった。

「このあいだ、昭斗が、わたしの台詞が変わったとか言ってくれて、とっても嬉しくって。そのあと、別の人からも同じような感想を言ってもらうことが何回かあったんだけど、最初に言ってくれたのは昭斗だった」

「オレが初めてのオトコだったというわけか」

「馬鹿ね、人聞きがわるいじゃん、初めてのオトコだ、なんて」

「で、その話とこのCスタとは、どんな関係になるんだよ」

「まあ、そんなに急かさないで。これから一緒にやってもらいたいことがあるから、じゃあ、カバンを隅のイスの上に置いてきて」

そうして、左枝は昭斗を自分の正面に立たせ、自分は昭斗の後ろに回って、背中でそつと昭斗にもたれかかかった。

「では、始めるよ。今、私の肩が昭斗の背中に触れているのが感じられるよね。」

昭斗のほうが背が高いので、左枝の肩は昭斗の背中に当たっている。うっすらと肌のぬくもりが伝わってくる。

「もっと強く寄っかかってきても大丈夫だぞ。」

「このくらいがいいんだよ、重さを強くかけると感覚がマヒしてしまうから。じゃあ、これから、コンタクト・ダンスの練習をはじめるね。」

「えっ、コンタクト・ダンスって何？」

「わたし、最近これにはまっていて。昭斗がこのあいだ、わたしの台詞が良くなってるって言ってくれたのも、これのお陰だと思う。あのね、コンタクト・ダンスは、身体の一部

分だけくっつけて、そのくっつけた部分をずらしながらふたりが自由にいろんな形になっていくのを楽しむ、コンテンポラリー・ダンスの一つ。相手の力の移動を感じとってそれに合わせていって、今度はその流れに自分のほうでこういう方向に進みたいなどと自然に思えたらそのように身体を動かしていく…まあ、実際にやったほうがわかってもらえると思うよ。じゃあ、始めるよ。あっ、そうそう、目は閉じたほうが相手の小さな動きの変化にも集中できるから、目はつぶろうね」

身体の一部だけくっつけて動く、ということは、お互いの胸と胸がくっつくときもあるだろうし、うまく動いていけば唇と唇ということも。

「昭斗、今、へんなことを妄想したでしょ」

「えっ、そんなことまで、背中をくっつけているだけでわかったしまうのかあ？」

「ばかっ、そんなことあるわけないでしょ。もう、わたしたち、付き合って一年もたつんだから、わかるよ」

「付き合ってるって、オレたち、そんな関係じゃないじゃん」

「でも、上京してここに入学してから最初に喋ったのは昭斗だったし、写真に役立つだろうからって言って劇団に誘ってくれたのも昭斗、わたしの台詞の変化を真っ先に認めてくれたのも昭斗だったんだよ」

「やっぱ、最初のオトコってわけだ」

「ばか。じゃあ、ホントに始めるから目をつぶってね。」

昭斗は目を閉ざし、背中 of 触れている部分に神経を集中した。と、わずかながら、背中の右のほうに左枝が肩を強めに押しつけてきた。そうして、その強く触れる部分が、肩から上腕へ、腕先からお互いの手の甲に移動してきた。

そして指先へ。爪と爪が当たっている。

昭斗は手のひらを返してすぐにでも左枝の手を握りしめたいと思った。しかしそれより早く、左枝の手はフロアをめがけるかのようにゆっくりと下降を始めた。

昭斗もその流れについていった、そうするのを左枝が望んでいるのだから。

さらにゆっくりと下降していく。昭斗はその場にしゃがむ格好になった。すると、今度はお互いに合わせていた手の甲の、人差し指のほうからはがれていき、小指の側面だけの接触になり、さらにその動きのまま、手のひらは自然に合わさっていった。

ここがCスタであることも意識から遠のき、ふたりがしゃがんでいるということも意識されず、触れ合う部分の移動だけがそこにあるかのようなようだった。肩から腕へ、そして手の甲から手のひらへ、というより、水平にゆっくり進んだ重心が斜めに下降してフロア付近にとどまり、そのまま小さな半円を描いたという感覚だった。

合わせた手のひらをもっとしっかり感じ合いたい、という欲求がどちらから発したのだろうか、手のひらが弧を描きながら少しずつ上昇するのにつれて、ふたりは膝を向き合わせるように、しゃがんだままでゆっくりと回転して正対していった。

そうして、合わせたままの手のひらは指先の方向に上昇して、ふたりはしずかに立ち上がった。

正面で向き合っている。これは昭斗が、いや、ふたりが望んだ形だったのかもしれない。